

史料紹介

船問屋口銭定他

中山 信人

かつて古書店で入手した来浦船問屋史料と、中世文書研究会で共に勉強している薬師寺氏所蔵の延岡藩千才役所史料を読む機会が与えられたので、近世史解明の一助になればと思ひ紹介する。

一 船問屋口銭定

口銭定

。大分市中判田
中山信人所蔵
写

来浦

一、鯛代銀百目ニ付

四匁

一、生魚

壹割

一、干鰯壹俵ニ付

四厘

一、穀類石ニ付

賣口銭壹匁買口銭五分

一、胡摩石ニ付

八分

一、荏子種子石ニ付

五分

一、他所商人日運上

十日切運上銀拾貳匁

一、莖壹束ニ付

壹分五厘

一、鯉節相物類

六歩

一、海草并八百屋物

六歩

一、竹木薪

五歩

一、唐津物

五歩

一、味噌醬油酢

四歩

一、蘭麻蒟蒻玉

四歩

一、塩煙草粕粉糠

四歩

一、木綿苧

三歩

一、酒

三歩

一、萬小間物類

三歩

一、鯨油壹挺ニ付

壹匁五分

一、砂糖古手紙類

式歩

一、藍玉素麵

三歩

右者他国より商賣ニ罷越候船問屋口銭前々より其品ニ応取来候此度相改口銭相極申付候且又旅船不依何品右定之外致商賣候ハ、銀高百目ニ付三歩之口銭可相受候若極之外口銭於請取者急度可申付者也

文政六年未十月

印

御郡所

来浦

問屋へ

二 御公儀御触請取張。
。大分市千才
薬師寺岩雄氏蔵

天保十一庚子 年 大分郡

從御 公儀御触御請書帳

六月 池上村

大目付江

油一件御改革後因々より大阪堺兵庫江相廻し候菜種追々相減候ニ付増方其外取締筋之儀江戸表より御下知之趣去戌年五月委細申達候ニ付於因々世話有之儀与相見其後廻着高相増候向茂有之一段之事ニ候然ル処春来菜種直段各別引上油直段ニ相響候儀ニ而古種遣高直故荷主船頭共氣強相成候場合可有之元来ニケ所江之廻着相

減候儀於因々御仕法を犯シ他因種も買糶絞油をも高直ニ他因賣致候ニ付荷主船頭共途中賣弥増候儀ニ無相達相聞候御改革ニ而因々絞油者手広く相成候得共都而高直之油を用ひ国民難渋之筋ニ付他因之絞草油共賣買更々不致様如何ニも取締有之候ハ、糶買等無之自然与菜種直段引下ケ下直之油を用ひ候様相成三ケ所江之廻着茂相増候道理ニ而御改革之御趣意ニ相當とも可申候商ひ物ニ候得共菜種綿実之儀者賣買方法有之事ニ付積船毎々送状ニ石数を記し領主役場之改印ニ而も被用相廻し候程ニ取扱有之候ハ、途中賣之愁有之間敷別而船着之土地ハ嚴密之取締無之而ハ差向下方之者江為申論役手江茂取締方可申談候左候而ハ先々手数ニ茂可相成儀ニ付先此度ハ不及其儀ニ候此末之増様寄組之者差向候儀茂可有之候間此段も申達置候何分ニも菜種三ケ所江廻着相進絞草油者全一因限り賣買菜種ハ作方相應之賣徳を加へ成丈下直之賣買ニ相成候様世話可有之候当表元立之土地柄ニ付絞草油共当表之相場ニ見合賣買可致儀之処無其儀ゆへ他因も高直杯与当表ニおゐて申成兎角ニ直段引上候哉ニ相聞不都束之次第ニ有之此節之増

様にてハ絞草及払底油融通合差支候様ニ可相成哉難捨

置候間格別ニ申達候早々因々江通達之上新菜

右之通従 公儀被 仰出候段御城下より申来候間承知

之上郡中村々江相触寺社江も可被申伝候最請書取之可

被下差出候、以上、

五月

右御触書之趣拜見 為者連印を以御受書差出し候

以上、

子六月

大分郡池上村五人組頭

清右衛門

⑨

浅平

⑨

作右衛門

⑨

儀兵衛

⑨

同村御手当 河辺治平

⑨

同 組頭 利作

⑨

同 嘉右衛門

⑨

同村兼帯庄屋 佐藤文平

⑨

右之通相違無御座候以上

同郡大庄屋

清水 又佑

千歳

御役所

三 菜種作高并捌方書上。大分市千才

当戊年菜種作高并捌方書上 菜師寺岩雄氏蔵

大分郡龍原村

当戊年作高

一、菜種三斗九升 但村中小前分

作高取集

但小前手元ニ而手絞自用仕候外ニ当村より 大阪へ差送

り候儀無御座候、当村ニ而中買仕候もの無御座候、

右者当戊年菜種作高并捌方、取調へ書上候様被仰付候

ニ付、村中吟味仕候御書面之通相違之儀無御座候、

以上、

大分郡龍原村組頭

梅太郎



友助



寛兵衛



関右衛門



善治郎



小野善右衛門



同村庄屋小野長兵衛



千歳

御役所

